

野生生物の観光利用のあり方について(話題提供)

2014年7月14日

提供者：北海道大学 敷田麻実 愛甲哲也(エコツアーWG委員・検討会議メンバー)

1 話題提供の趣旨

近年の知床世界遺産地域では、ヒグマへの観光客やカメラマンの接近、エゾシカへの接近、キタキツネへの給餌など、野生生物の観光資源化が進み、適正な野生生物と観光利用のあり方が課題となっている。

しかし、知床が国立公園であり、また来訪者のアクセスがある以上、来訪する観光客によって多様に資源化されていくことは拒否できない。また観光資源化は、資源としての価値を生み出し、さまざまな利用による利益を生み出すので、地域社会や経済にとっては必要なプロセスでもある。

しかし、マネジメント(管理)されていない過度な資源化は、観光資源化ではなくとも維持可能ではなく、開発のスピードが速すぎれば問題を発生させる。

この点では、知床地域では一方で、ウトロのケイマフリの保全活動のように、観光資源化することで、資源価値が共有され保全活動と観光利用が両立で来ている優れた事例もある。また、「ヒグマえさやり禁止キャンペーン」は一定の成果を上げ、こうした対策が有効であることを示している。

そこで今後の知床世界自然遺産地域の野生生物の(観光)資源化をマネジメントするために、検討会議参加者の意見を聞く機会を持ちたい。

なお、野生生物と観光客の関係自体が、知床地域の姿勢を示すことになり、「プレイス・ブランディング」につながり、知床としての「評判」につながる重要な要素である。また、マネジメントされた適切な資源化は、野生生物の保護や保全にも資すると考えられる。



2 考えられる枠組みと議論の進め方の例

野生生物の観光資源化の研究

野生生物観光資源化方針の策定

野生生物の保全との関係

ヒグマなどの個別問題の解決の支援(キャンペーンの充実?)

野生生物観光資源化(または非資源化)マニュアルの策定

